美歴だより

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.23

CONTENTS

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき　2
BIREKI・レポート　3
いさはやの生活　4
いさはやの歴史　5
美術の部屋　6
古文書の部屋　7
お知らせ

常設展示室『諫早の美』より

諫早にゆかりのある絵画や書、工芸品などを鑑賞することができます。

掛軸：「魚籃観音」小波魚江　　陶器：三彩平盃（長与焼）　美術・歴史館蔵

マスクの着用や入館時の手指消毒をお願いします。
発熱等の症状のある方のご利用はお控えください。

Kancho no tsubuyaki

館長のつぶやき

－Vol. 6－

「館長講座」

今年度から始めました「館長講座」はこれまでに３回を終了いたしました。本講座は、本市ゆかりの芥川賞作家野呂邦暢氏の歴史小説「諫早菖蒲日記」を取り上げ、小説に記されている郷土諫早や関係の深い佐賀藩に関する歴史事象について、野呂邦暢氏が執筆時参考にされた「諫早市史」を中心に確認するとともに諫早の歴史等を学んでいこうというものです。２月の第４回で「諫早菖蒲日記」の第１章を終えることにしています。

これまで本講座で取り上げた歴史事象は次の内容です。

諫早領の公船・長崎警備・時を告げる安勝寺の鐘・刑罰（業柱抱き）・平松神社・伊佐早氏・百済人の末裔・高城・漢方医から蘭方医へ・伊能忠敬とまだら節・大川の蛍・藩士の禄引き・島原の乱での諫早勢の勲功・諫早騒動（一揆）・鍋島氏の主であった諫早家龍造寺・砲術吉田流と萩野流・家中内職の奨励・諫早水害時の炊き出し

更に２月の講座では、西郷氏の出自・諫早家の弓組・奥女中（浦島等）・田圃の虫追いについて取り上げます。

「諫早菖蒲日記」の第１章から諫早に関係する様々な歴史事象に触れてまいりましたが、何より野呂邦暢氏がそれを執筆するにあたって丹念な調査をされていることが伝わってきました（「小説」ですから一部登場させる人物名を変えたりしておられるところもありますが）。調査資料は「諫早市史」にとどまらず、記述された歴史事象を調べていくと佐賀藩の資料にも及んでいることがわかります。それは第２章・第３章でも伝わります。しかし、野呂邦暢氏の豊富な読書量からして既に知識としてあったからこそ、更に調査を深め「諫早菖蒲日記」という物語の中に盛り込まれていったのだろうと推察します。そんなことを考えながら小説に出てくる歴史事象について、「諫早市史」をはじめとする資料で記述箇所を探し確認していく中で、私自身が不案内だった諫早の歴史について学んでいるところです。

今年度の講座は１回を残していますが、次年度は「諫早菖蒲日記第２章」について進めていきたいと考えています。一口に歴史事象といいますが、「諫早菖蒲日記」の記述内容をたどると多岐に渡る出来事や当時の風習もあり、学ぶことが多くあります。また、野呂邦暢氏の執筆時の軌跡にほんの少し触れられることも有り難いことと思っています。今後の講座でも、皆様と共に学びを深めたいと思いますのでよろしくお願いします。

さて、先日書店をのぞいてみると野呂邦暢氏が晩年に執筆したミステリー作品を集めた「野呂邦暢ミステリ集成」（中央公論新社：文庫本）を見つけました。１０月２５日に初版が発行されていますので既に手に取られ読まれた方もいらっしゃると思います。早速購入し読みましたが、歴史小説である「諫早菖蒲日記」とは違う味わいのある作品群です。文庫本の帯には「わずらわしい世事を忘却するために」とありました。確かに作品の中に自分が入っていくような、そんな感覚を味わうことができました。読んでいる時は正に「わずらわしい世事を忘却する」ことができました。

（館長：堀　輝広）

BIREKI・レポート

Vol.13

廣津雲仙展

9月19日㈯～10月11日㈰に
生誕110周年を記念し、廣津雲仙展を開催しました。
廣津雲仙は諫早市高来町出身の書家で、数々の賞を受賞されるなど書道界の重鎮として活躍されました。
今回の展示では、市等が所蔵する作品26点を展示しました。

新指定文化財展

10月16日㈮～10月25日㈰に
昨年11月に市指定文化財が6件、本年2月に「諫早家文書」が県文化財に指定されたことを機に、新指定文化財展を開催しました。今回の展示では、「諫早家歴代肖像画」や「太良嶽縁起」、「諫早家文書」などを展示しました。

◀展示風景▶

エ―セルテレカラフを展示しました

11月の1ヵ月間、国指定重要文化財である「エーセルテレカラフ」を展示しました。
現存する日本最古の指字式電信機で、送信機と受信機があり、文字を伝えることができます。
常設展示室にレプリカがあるのでぜひ体験してみてください！

▲エ―セルテレカラフ：受信機

送信機と受信機には、イロハニホヘトチリヌルヲ…と書かれています

エーセルテレカラフ：送信機▶

（柿田佳央理）

いさはやの生活

VOL.6　主婦とあきない

家庭の主婦はもちろん家庭内の物事を取り仕切るのですが、昭和の時代までは、その一方で働くのが当たり前でした。今のように家庭のことに専念するということはほとんどありません。家事のほかに田畑の仕事、山への焚物とりなど一日中働いていました。休むのをヨクウといいますが、その時間はわずかでした。

主婦の働く仕事のなかにあきないがありました。品物を売り歩くのですが、前の日にとってきた畑の作物などを夜なべで小分けにし、翌朝早く、諫早の町などへ売りに行きます。季節の野菜などのほか、有喜では港に着いた船から魚を買い、それを売り歩きます。有明海沿いの深海ではアミツケやハゼをあきなっていました。あきないする主婦はたいてい得意先をもっていました。あきなう品物をメゴに入れ、仲間数人で街中あたりに入ると、仲間内で集まる場所を決めていて、そこから各自の得意先をまわります。本野や小野、東小路町などとそれぞれ別れてあきないをするのですが、顔なじみになると注文を受けることも多くなりました。持ってきた品物は全て売るもので、特に魚などは売れるまで回っていました。残して帰ると舅さんから叱られたものでした。

あきなう物は作物のほかに焚物やシバといった山からとってきたものもあり、これは山手の主婦が有喜や小野島あたりへ売りにいっていました。それぞれのところにない物をあきなっていたものです。あきないは毎日の仕事で、重い荷をオウコで担いで早見―天神―小ヶ倉―小川町、あるいは天神―有喜―早見、深海―大村などと道を往復し、歩き回るのはきついことでした。帰りはまた集合場所でおち合い、いっしょに帰ります。落ち合う集合場所ですが、うどん屋、ちゃんぽん屋というのが多かったようです。

昭和はじめころ、主婦はネッソデ（捩じ袖の膝丈の着物）にキャーフ（腰巻）、脚絆、足袋、バッチョ（笠）、ジョーイ（藁草履）という服装で回っていました。あきないを終えるのは昼ごろで、家へかえると畑の仕事や水汲みなどが待っていました。

『メゴ』

（川内知子）

いさはやの歴史　―諫早鉄道史―

九州新幹線西九州ルート（武雄温泉～長崎間）が二〇二二年秋頃に暫定開業の予定です。新車両名も「かもめ」に決定しました。そこで、諫早市内の鉄道敷設について振り返りたいとおもいます。

ＪＲ長崎本線

九州鉄道会社【明治二十年（一八八七）設立】により、明治二十四年（一八九一）鳥栖～佐賀間の九州鉄道佐賀線が始まりで、明治三十年（一八九七）鳥栖～早岐間・長与～長崎間（現浦上駅）が開業します。明治三十一年（一八九八）鳥栖～早岐～長崎間【諫早・喜々津・大草の各駅が新設】が全通するまでの約一年間は、大村湾に連絡船を開設し、暫定的な連絡手段としました。明治三十八年（一九〇五）現在の浦上駅より長崎駅までが延伸され、鳥栖～早岐～長崎間（現長崎駅）となります。明治四十年（一九〇七）九州鉄道の国有化により帝国鉄道庁九州帝国鉄道となり、明治四十二年（一九〇九）鳥栖～早岐～長崎間の線路名称が「長崎本線」となります。

昭和五年（一九三〇）肥前山口～肥前竜王間が開業したのが有明線（現長崎本線）始まりで、昭和九年（一九三四）三月、有明西線として諫早～湯江間【東諫早・肥前長田・小江・湯江の各駅が新設】が敷設、同年十二月に肥前山口～諫早間【小長井駅が新設】が全通しました。その際、従来の長崎本線の内、早岐～諫早間を大村線、肥前山口～佐世保間を佐世保線とし、鳥栖～肥前山口～諫早間が長崎本線となりました。昭和四十七年（一九七二）喜々津～市布～浦上間の短絡線（市布経由）が敷設、昭和五十一年（一九七六）に電化、昭和六十年（一九八五）民営化に伴い九州旅客鉄道株式会社（ＪＲ九州）が発足します。

島原鉄道

島原鉄道株式会社【明治四十一年（一九〇八）設立】により、明治四十四年（一九一一）六月、本諫早～愛野間を敷設、同年八月、諫早～本諫早駅間が延伸しました。大正二年（一九一三）諫早～南島原間を敷設。昭和十八年（一九四三）口之津鉄道を吸収合併し、諫早～加津佐間が開業。平成二十年（二〇〇八）四月、島原外港～加津佐間が廃止されました。

（大島大輔）

『昭和九年十二月　有明線全通記念絵葉書　鐵道省熊本建設事務所』

「小長井停車場付近線路」

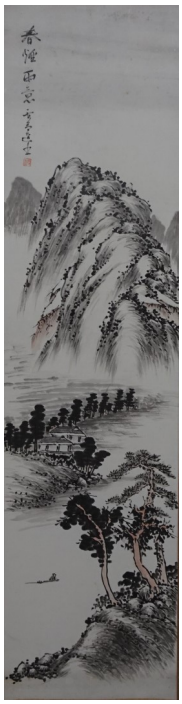
※現在の小長井小学校交差点付近より小長井駅を撮影。

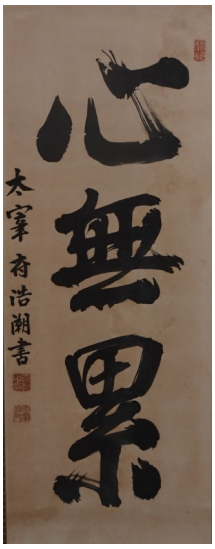
有明線（長崎本線）は昭和9年（1934）12月1日に開通しました。

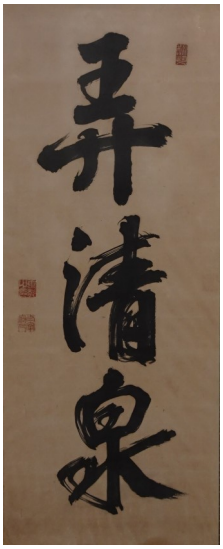
Vol.12

美術の部屋

１１月から１２月にかけて、傷みがひどいものや表装がされていなかった資料の修理を行いました。これらの作品は未公開でしたが、展示できる状態となりましたので、改めて調査を実施し、その後公開する予定です。早ければ来年にも展示したいと考えていますので、どうぞご期待ください。







（松本恵美）

古文書の部屋

花押(かおう)と印章【一】

古文書の中に、文書の作成者および文書内容の承認を明確にする「しるし」として数多く使用されたものが「花押(かおう)」と「印章」です。それぞれ発生・流行した時代は異なりますが、どちらも文書に権威や意味づけを加えるために重要なものであり、現代社会でもその役割が引き継がれています。両者の特徴について理解するため、まず今回は「花押」についてご紹介します。

花押とは

特徴

古代の署名に端を発し、平安中期から発達した、文書の末尾に記す文書発給者の署名を独特に模様化させたものです。文書に証拠能力を与えるもので書札礼上、印章より優位にあります。

変遷

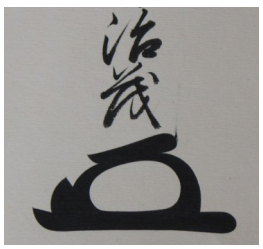
花押は中国の唐代から現れますが、日本では平安時代の10世紀の頃から次第に用いられるようになりました。主な類型として以下の五つがあります。

- 「草名体」…草書体をさらに図案化。
- 「二合体」…漢字の「へん」や「つくり」の組み合わせ。
- 「一字体」…特定の文字を図案化。
- 「別用体」…文字と関係のない動物等の形を図案化。
- 「明朝体」…中国の明代に流行した様式。天地二本の線を引いたもの。

平安時代は草名体・二合体が主流であり、中世になると二合体・一字体へと流行が移り、江戸時代には明朝体がもっとも多用されます。しかし次第に花押は姿を消し、庶民を中心に「印章」に取って代わられていきました。

参考

江戸時代に流行する明朝体の花押は、諫早家に伝わる古文書にも現れています。下の写真は『御一字御拝領御書附(おんいちじごはいりょうおんかきつけ)』(当館所蔵)という古文書の末尾に記された、佐賀8代藩主・鍋島治茂の署名と花押です。



この古文書は、諫早家11代領主・茂圖(しげつぐ)が佐賀8代藩主・鍋島治茂より「通字(とおりじ)」である「茂」を拝領したときの書状です。「通字」とは先祖代々伝えられ、実名に付ける文字のことで、与えられた家臣にとっては栄誉であり、藩主にとっても自らの威光を高めることができました。「通字」を与える行為に際し「花押」を書くことは、権力者にとって文書に権威や意味づけを加える役割を担っていたと言えます。

出典：「図録　古文書入門事典」(若尾俊平著/柏書房)
「古文書入門ハンドブック」(飯倉晴武著/吉川弘文館)

(江口喬裕)

お知らせ

Information

発行日：令和２年１２月

企画展　観覧料/無料

M・マリーニと M・シャガール版画展
-長崎県美術館コレクションによる-

会　期
令和３年2月27日（土）～3月28日（日）
10時～19時　※最終入場は18時30分
休館日：毎週火曜日

会　場　２階企画展示室

切手の中のアート展

会　期
令和３年2月20日（土）～3月14日（日）
10時～19時　※最終入場は18時30分
休館日：毎週火曜日
（ただし、２月２３日（火）開館、
２月２４日（水）休館）

会　場　１階ホール

申込方法（講座・イベント）

講座名、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を記入し、以下の方法でお申し込みください。
・はがき（〒854-0014　諫早市東小路町2-33）
・ファックス（0957-24-6633）
・メール（bireki@city.isahaya.nagasaki.jp）
申込締切　令和3年1月31日（日）　**※必着**
※お電話での申込はできません。

講座・イベント　聴講料/無料

館長講座
『諫早菖蒲日記と諫早の歴史④』

と　き　令和３年2月21日（日）
１３時３０分～１５時
ところ　美術・歴史館　２階研修室
講　師　堀　輝広（美術・歴史館館長）
定　員　30名※申込多数の場合は抽選

歴史講座
『江戸時代の災害Ⅰ』

と　き　令和３年2月14日（日）
１３時３０分～１５時
ところ　美術・歴史館　２階研修室
講　師　大島　大輔（美術・歴史館専門員）
定　員　30名※申込多数の場合は抽選

諫早の寺社（史跡見学）

市内中心部の寺社（安勝寺、慶巌寺など）を訪ね、寺に伝わる仏像や石碑などの文物を拝観します。（すべて徒歩移動）

と　き　令和３年2月13日（土）
１０時～１７時
講　師　川内　知子（美術・歴史館専門員）
定　員　25名※申込多数の場合は抽選

申込方法は左記のとおり

貸館の利用について

美術・歴史館のホール、企画展示室、研修室はどなたでも利用できます。（要予約・有料※減免制度があります）
ただし、利用目的が美術（写真、漫画を含む）、華道、茶道及び歴史などに限られております。詳細は、お気軽にお尋ねください。

『来館者への連絡票』の記載について

入館の際、連絡先等の記載をお願いしております。新型コロナウイルス感染症の疑いが生じた場合のみに使用するものです。皆様のご協力をお願いします。

ー編集後記ー

今年は、県展、市展などが中止となり、いつもは賑わう秋も静かに過ぎていきました。
貸室を利用される皆様には、密にならないような展示方法、マスク着用、手指消毒などにご協力をいただき感謝申し上げます。
1月からは、書道展や絵画展など貸館のご利用予定も増えております。
2月は、館主催の企画展、講座等も予定してます。お楽しみに★
詳細は、上記「お知らせ」をご覧ください。

（野田さやか）

編集・発行／諫早市美術・歴史館　〒854-0014　長崎県諫早市東小路町2-33　TEL:0957-24-6611　FAX:0957-24-6633